

「神の言葉を受け入れて生きること」

ルカによる福音書 1 章 26～38 節

人文学部児童学科特任講師 野村 春文

1 自己紹介

私は2017年まで38年間、埼玉県の特例支援学校の教員として特に身体の不自由な子どもたち関わってきました。そして聖学院大学人文学部児童学科の教員として2018年の春に着任しました。専門は特別支援教育、特に肢体不自由児教育です。

そして、私はクリスチャンですが、カトリック教会で洗礼を授かって、現在も群馬県のカトリック教会で毎週のミサにあずかっています。

2 ローマ教皇のこと

去る2019年11月23日、ローマ教皇フランシスコが来日しました。ローマ教皇の来日は32年前の教皇ヨハネ・パウロ2世以来でしたが、今回も私たちの信仰に対しても、平和な社会を願うすべての人たちに対しても勇気を与えてくれる数多くの言葉を残してくれました。その中で、ここでは特に上智大学を来訪した際、学生に向けて話された言葉を紹介します。

「日本は効率性と秩序によって特徴付けられています。それだけにとどまらず、より一層人間らしく、思いやりのある、慈しみに満ちた社会を作り出したいという熱い思いを感じました。」また「どんなに複雑な状況であっても自分たちの行動が公正かつ人間的であり、正直で責任を持つことを心がけ弱者を擁護するような人になってください。ことばと行動が偽りや欺まんであることが少なくない今の時代において特に必要とされる誠実な人になってください」教皇のこの言葉は、日本のこれからの社会を担うすべての学生に向けられた言葉でもあると思います。

3 さて、今日の聖書の言葉ですが、いわゆるマリアの受胎告知と言われている部分です。

天使のお告げを聞き、心とからだを持って神の言葉を受け、世に「いのち」をもたらした乙女マリア。カトリックカルメル修道会の中川博道神父の言葉を引用させていただきますが、「キリスト者一人ひとりの典型であり、イエスに従って生きる上での模範でもあるマリアは、単に体においてだけではなく、心においてもイエスを身ごもり、受け止めたことを伝えています。こうして受け止めたイエスを自らのうちで養いつつ、やがて、この世にこの「いのち」そのものであるイエスをもたらす者となりました。しかしイエスを生んだ後も、マリアはその心においてイエスを育て続け、やがて大人としてのイエスをその心で受け止め続けていくことになったのだと思います。

キリスト者の模範であるマリアの生き方は「私は主のはしためです。お言葉のとおり、この身になりますように。」の中に言い尽くされています。

私たちカトリック者がマリア様をお手本にしたいと思うのは、聖書に書かれているマリア様の姿は、父である神様をどんなことがあっても信頼し続け、どんな悲しいこと、つらいことがあっても、その信頼が揺るがず、希望を失うことなく、神様が導いてくださることに身をまかせて、祈りつつ、神様が下さる答

えをじっと待ちながら生きていくということであると思います。

4 障害がある子どものこと

私が特別支援学校の教員をしていた時、小学生になる子どもの就学に係る相談会の場で、ある子どもと出会いました。その子は筋肉の病気で年齢と共に筋肉に力が入らなくなり、歩くことや手を使うことなどが難しくなっていくという進行性の難病でした。

当時は、まだ自分の病気も知らず、生活の中では少し歩くのがゆっくりで、疲れやすいという程度のもので、性格も明るくかわいらしい男の子でした。しかし、もちろん両親はその病気のこと、これからたどるであろう運動障害の進行のことも知っていました。

私は、その子の母親から相談を受け、その後も定期的にその子どもの教育相談というかたちで、筋力が低下していくのを少しでも遅らせることと、心身の成長に伴う心のケアについて伝えてきました。

小学校へ入学してからは、年々歩く様子が変わってきました。だんだんかかとがつかなくなり、歩く姿勢も不安定になり、4年生になったころ、とうとう歩くことができなくなりました。友だちは、できるが増えるのに対して、自分はいろいろなことができなくなる。そんな毎日を送る中で気持ちは不安定になり、学校も休みがちになりました。時に両親にもやり場のない苦しさをぶつけることもありました。しかしお母さんはそんな彼の心とからだを毎日必死で支えていました。

力が入らなくなり、自分の身体も支えることが難しくなることに対して、お母さんは毎日のように彼と向き合い、私が伝えた筋力を維持するためのからだの取り組みを続けました。

中学生になり特別支援学校へ転学し、身体の学習を大切にしながら勉強に励みました。

このころ心も成長し、彼は自分の病気について知ることとなりました。当時はこれからの自分について、なかなか受け入れられなかったと思います。

しかし、お母さんの熱心な関わりの中で少しずつ受け止めることができるようになってきたようです。

それからは勉強にも熱心に励むようになりました。

そして同じ病気の友達の誘いもあり、車いすサッカーをやり始めました。電動車椅子を残った手の指の力で動かしての参加ですが、そのことは生き甲斐を持つことにつながり、身体の学習に励むことにもつながりました。車いすサッカーの練習を行った後は全身がガチガチにこわばり、動かなくなってしまうのですが、お母さんの彼への身体への関わりはこわばった筋肉をほぐし、深い呼吸と共にくつろいだ時間を過ごすことにつながりました。

医療機関においても、ドクターやリハビリテーションを行う理学療法士から、この年齢を考えると、身体がとても良い状態と言われたことが励みとなり、今では仕事が忙しいお父さんも積極的に体にかかわるようになってくれています。

現在、彼は特別支援学校を卒業し、20歳になりました。皆さんと同じ世代です。病気の進行のために、身体を動かす力は少しずつ弱ってきて、先日会った時に「車いすサッカーを引退しました。サッカーはやめたけど新しいことに打ち込みたい。」とっていました。彼は今、卒業と同時に就いたある事業所の仕事を在宅の形で得意とするパソコンを駆使して行っています。体はとても疲れるけれどとても充実した毎日を過ごしているとのことでした。

心身ともに大人になった彼ですが、いろいろとつぶやきたいこともあるようです。それも、お母さんに体に触れてもらい、こわばったからだをほぐすときに、そのつぶやきをつたえることができるようです。

「うれしいこと、悲しいこと、触れているときに感じられます。」お母さんが言っていました。ずっとやってきた心とからだをほぐすふれあい、それを通して親子で気持ちを伝えることができる。

おかあさんは彼のことについていつも心をくばり不安も受け止め、共感し一緒に歩んでいます。また彼は、口に出さなくてもわかってくれるおかあさんに全信頼を置いていると思います。

その中で大きな安らぎを得ることができるのでしょう。

すべてを受け止め、与えられたものを大切に生きている彼とお母さんの姿は、神様を信じて生きる私自身への問いかけにもなっていると思いました。

神さまは私たちと共にいます。神さまのことばをしっかり受け止め、たとえ逆境にあっても信頼し希望を失わずに祈りながら歩んでいきましょう。

2019年12月12日 聖学院大学 全学礼拝